



NBA「八村塁」「渡邊雄太」で「過去最強」 「モントリオール戦士」が 振り返る45年前の屈辱



元日本代表の桑田さん

野球とサッカー、日本における二大メジャー球技。バスケットボールはその陰に隠れがちで、とりわけ五輪の舞台で日本代表が輝くことは久しくなかった。な

にしろ今回が、1976年のモントリオール以来の五輪出場なのだ。半世紀近くの時を経て、大舞台での活躍の期待が高まっている。

とはいえ、その出場はいわゆる開催国枠によるもの。期待のし過ぎは禁物にも思える。

それでも、日本人初のNBAプレーヤーである田臥勇太は、今回の日本代表をこう絶賛した。

「過去最強」
これを受け、バスケットボール解説者の島本和彦氏も、

「間違いなく史上最強の代表チームです」
と、太鼓判を押すのだった。NBAで活躍中の八村塁に渡邊雄太、さらにオーストラリアでプレーしている馬場雄大といった海外組

が揃っている点が注目を集めているが、強さの秘密はそれだけではないという。

「海外組に触発され、国内組も調子を上げてきています。例えば日本のプロリーグの選手である比江慎慎は、緩急自在のドリブルで敵をかまし、カットインするプレーを得意としている。しかし、これまで国内では力を発揮しても、外国相手の試合となると、自信がなかったのか積極的なカットインが見られませんでした。ところが、強化試合をこなしていくなかで手応えを掴んだのでしよう。開幕前の7月18日に行われたフランス戦では八村と渡邊に続く15得点をあげました」(同)

彼の活躍もあり、世界ランク7位のフランスとの強化試合に、同42位の日本は勝利。いやが上にも期待が高まるのである。

「捻挫に正露丸」

そんな「最強チーム」を、モントリオール五輪バスケット日本代表の桑田健秀さん(68)は目を細めて見守っている。

「バスケットでまず大事なのは身体の大きさ。今の日本代表は身長が2メートルを超える選手も珍しくなく、外国の選手にも当たり負けしない。八村、渡邊、馬場の海外組を見てみると、世界の第一線で活躍してきた自信と圧倒的なオーラを感じます。僕らが日本代表だった頃は、アメリカの高校生相手に負けていましたからね。それと比べれば、今の選手たちは格が違います。まさか、こんなに強くなるとは想像もしていませんでした」

現代表を手放しでこう評価する桑田さんが、改めて45年前を振り返って続ける。「僕たちの時代は、スポー

ットレーナーや栄養士なんていませんでしたからね。捻挫をしても、「正露丸を飲んでけ」で終わり。スポーツが精神論で語られる時代でした」

そんな時代に、「体格勝負」の面があるバスケットで、桑田さんたちは世界に挑んだのである。

「モントリオール五輪での日本の公式記録は参加12カ国中の11位となっていますが、これは順位決定戦の前にエジプトが帰国してしまい、不戦勝したからなんです。ですから、我々の実感としてはビリ。そんな僕たちが、「最後のバスケット五輪代表」と言われることも、もうなくなりました。八村や渡邊がいる今回の史上最強チームには、ジャイアントキリングを期待しています」
身長203センチの八村と206センチの渡邊が、その大きな身体で45年分の期待を背負い、これからスロベニア(世界ランク16位)とアルゼンチン(同4位)に挑む。